

Vaiśeṣika 学派の apekṣābuddhi

宮 元 啓 一

1. 序

apekṣābuddhi (略 ap. b.) という術語は、徹底した概念実在論 (conceptual realism) の立場を採る Vaiśeṣika 学派にとつて、その哲学体系を首尾一貫させる上で重要な役割を果している。現存の資料を見る限りでは、*Vaiśeṣikasūtra* ではなく、*Prāśastapādabhāṣya* に於て初めて現われると考えられる。これが *Prāśastapāda* の独創によるか否かは別として¹⁾、彼はこの術語を使用することによつて、我々の主観の作用に深く関わるいくつかの問題を甚だ巧妙に且つ明快に説明することに成功した。後世の Vaiśeṣika 学徒たちは彼の説明に満足しており、彼等の説く所は彼の説明を一步も出ることがない。また、この ap. b. という術語は彼等にとつて余りにも周知のことであつたためか、この術語の直接意味する所に関しては殆んど議論がなされなかつた。この様な事態が、ap. b. という複合語の複合の仕方の奇妙さと相俟つて、近代の諸学者の理解に少なからぬ混乱を齎したと思われる。例えば、Cowell は the distinguishing perception²⁾、Keith は the relating cognition と訳している³⁾。他の学者の訳⁴⁾はほぼこの二人の訳そのもの、あるいは変形であるが、唯一人 Faddegon のみは fundamental intellection と訳している⁵⁾。すなわち、Faddegon を除くすべての学者は、ap. b. という術語を訳す際に、buddhi が対象を把握するという局面を想定し、apekṣ- する主体が buddhi であ

略号 KA: Udayana's *Kiraṇāvalī* (*Kiraṇāvalī of Udayanācārya*, ed by Jitendra S. Jetly, Gaekwad's Oriental Series No. 154. Baroda: Oriental Institute, 1971).

NK: Śrīdhara's *Nyāyakandālī* (*Prāśastapādabhāṣya with Commentary Nyāyakandālī of Śrīdharabhaṭṭa*, ed. by Kṣetresachandra Cattopadhyaya, Gaṅganātha Jhā Granthamālā Vol. 1. Varanasi: Varanasya Sanskrit Vishvavidyalaya, 1963).

PBh: *Prāśastapādabhāṣya* (see NK).

VV: Vyomaśīva's *Vyomavattī* (*The Prāśastapādabhāṣyam with a commentary Vyomavattī*, ed. by Gopinath Kavirāj and Dhundhirāj Shāstri, Chowkhambā Sanskrit Series No. 396, Benares: Chowkhambā Sanskrit Series Office, 1931).

1) 本稿〔附記〕参照。

2) *Sarvadarśanasaṅgraha* 訳 (Aulūkyadarśana 章)。

3) *Indian Logic and Atomism*.

ると解しているのである。この解釈には重大な疑義があるが、その是非を問う前に、Vaiśeṣika 学派、特に Praśastapāda が ap. b. なるものをどの様に機能させているかをまず以下に概観したいと思う。

II. apekṣābuddhi の機能する場面

PBh で ap. b. という概念が要請されるのは, samkhyā (dvitva 等) (数体), prthaktva (dviprthaktva 等) (別異性), paratva (かなたであること), aparatva (こなたであること) の発生と認識を説明する個所に於てである。

[1] guṇasādharmyavaidharmyaprakaraṇa に次の一文がある。

「paratva, aparatva, dvitva, dviprthaktva 等は buddhi を起因とする」⁶⁾

諸註釈によれば, paratva 等はその発生に際して buddhi に apekṣ- する⁷⁾, buddhi なしには存在しない⁸⁾, buddhi は paratva 等の発生 of 動力因と考えられる⁹⁾。そしてこの buddhi こそが ap. b. なのである¹⁰⁾。すなわち, paratva 等の四種の性質は, 純客観的に我々の主観の外に存在するものではなく, 個々人の主観が介在することによつて始めて生ずるものである。例えば samkhyā について言えば, ekatva という性質はそれぞれの実体に本来的に内在していて, その知覚はプロセスに於て他の外的対象の知覚と何ら異なるところはないが, dvitva 等はあらかじめ実体に内在しているのではなく, 個々人が自らの主観によつて選択するのを俟つて始めて発生し, 然る後に改めて知覚されるのである¹¹⁾。

[2] dvitva 等の発生に関わる ap. b. については筆者の別論文¹²⁾参照。

[3] dviprthaktva 等の発生に関わる ap. b. は, 基本的に samkhyā の発生に関わる ap. b. と相同なので, ここでは検討を割愛する。

[4] paratva, aparatva には空間的なものと時間的なものとがあるが, ここでは

4) PW: die auf die Mannigfaltigkeit der Dinge gerichtete Geistesthätigkeit; G. Jhā: distinctive notion (PBh 訳), unitary conception (*Tattvasaṃgrahapañjika* 訳); Apte: distinguishing perception (*The Practical Skt-English Dictionary*).

5) *The Vaiśeṣika-system*.

6) PBh p. 249 l. 3. paratvāparatvadvitvadviprthaktvādayo buddhyapekṣāḥ.

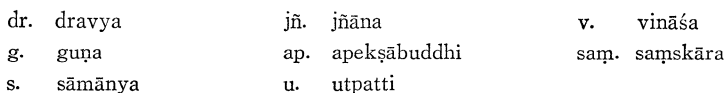
7) VV p. 435 l. 20.

8) VV p. 435 l. 23.

9) NK p. 239 ll. 7-8.

10) KA p. 108 l. 23.

11) このことに関しては次の論式がある。[P]dvitva は buddhi より生ずる。[H]必



(1) ある人がいて、同一方向に物体AとBを見たとする。その人とAおよびBとの間隔を然るべき単位で分割し、その人から各単位を経てAおよびBに至るまでの結合(samyoga)の数を数えた時に、その数(つまり距離)に多寡がある場合(ここではBの方が多いとする)、Aを基準として、「AよりもBの方が遠くにある」という buddhi がBという物体に対して生ずる。この buddhi が ap. b. である。

ず一人の認識者によつてしか知られないから。〔U〕必ず一人の認識者によつてしか知られないものは、すべて知覚より生ずる。例えば快感等の様に。〔Up〕*dvitva* も必ず一人の認識者によつてしか知られない。〔N〕故にこれもまた *buddhi* より生ずる。(NK, p. 275, ll. 9-11)

13) PBh p. 394 l. 2-p. 396, l. 3, p. 399 l. 2-p. 401 l. 2. なお [] 内の (6) (7) は, dvitva の発生・消滅の過程 (PBh samkhyāprakaraṇa) からの類推で補った。

takāraṇa) として, *paratva* という性質が発生する。

(3) *paratva* 一般に関する知覚が発生する。

(4) *paratva* に関する知覚が発生する。先の *paratva* 一般に関する知覚の発生によつて, *ap. b.* が消滅する¹⁴⁾。

(5) 実体に関する知覚(「BはAよりもかなたにある」という知覚)が発生する。先の *ap. b.* の消滅によつて, *paratva* が消滅する¹⁵⁾。先の *paratva* に関する知覚の発生によつて, *paratva* 一般に関する知覚が消滅する。

〔(6) 潜在印象が発生する。先の実体に関する知覚の発生によつて, *paratva* に関する知覚が消滅する。

(7) 先の潜在印象の発生によつて, 実体に関する知覚が消滅する。〕

[5] *ap. b.* は PBh に於てもう一個所, 量を論ずる個所に現われる。非常恒の量¹⁶⁾の発生の原因として, *saṃkhyā*, 量, 集積の三者が挙げられるが, 人間によつては知覚され得ない原子, 二原子体の *saṃkhyā* は, 主宰神の *buddhi* によつて生ずるとされる。この *buddhi* は勿論 *ap. b.* である。したがつて, この *ap. b.* の機能は, [2] の *saṃkhyā* の場合と全く同じである。

Ⅲ. *apekṣābuddhi* という語の用法

以上, *ap. b.* が PBh に現われる場面のすべてを概観した。*ap. b.* の機能はこれで理解し得るが, 端的に *ap. b.* とは何かを理解するためには, それらの場面に於てこの *ap. b.* という語が如何なる用いられ方をしているかを知る必要がある。

まず, PBh に於る用法は以下の如くである。

A *ap. b.* が何を対象としているのかを示す場合には, *ap. b.* という語は用いられず, 単に *buddhi* という語のみが用いられる。(7 個所)

anekaviśaya-buddhi-¹⁷⁾ *anekaviśayiṇī buddhiḥ*¹⁸⁾

*saṃnikṛṣṭā/ asaṃnikṛṣṭā/ viprakṛṣṭā buddhiḥ*¹⁹⁾

B *paratva*, *aparatva*, *dvitva* 等, *dviprthaktva* 等の発生に対して, *ap. b.* が

14) これは知覚の非同時性の原則に基づく。詳しくは拙稿前掲論文 pp. 230-231 参照。

15) 動力因の消滅によつてある種の結果は消滅する。拙稿前掲論文 p. 220 参照。

16) PBh では, 量は常恒のものと非常恒のものに分類される。常恒の量は常恒の実体に内属するものである。

17) p. 272 l. 1, p. 282 l. 1.

18) p. 272 l. 4.

19) p. 395, l. 1, p. 396, l. 2, p. 398, l. 1, p. 398, l. 2.

如何なる因果関係を有するかを示す場合にも, ap. b. という語は用いられず, 単に buddhi という語のみが用いられる。(7 箇所)

buddhy-apekṣāḥ²⁰⁾ buddhim/ tām apekṣya²¹⁾

C これに対して, その知覚内容, およびそれによつて生ずるものとの関係には直接触れることなく, 単にその ap. b. 自体の発生と消滅を説く場合には, 専ら ap. b. という語が用いられる²²⁾。(27 箇所)

次に後期の文献についてであるが, 筆者の散見した限りでは, PBh の **A** の用法は極く少数の例を除いてほぼ完璧に踏襲されている。また, **B** については, apekṣ-, ā-rabh-, bhū- (vinā na) という動詞あるいはその派生語と共に説かれる時には, 単に buddhi という語のみが用いられる。しかし, jan- という動詞あるいはその派生語と共に説かれる時には, buddhi, ap. b. 両方の語が任意に用いられる²³⁾。また, ut-pad- の場合には専ら ap. b. という語が用いられる様である²⁴⁾。**C** については, PBh の用法がそのまま踏襲されている。また, この場合, ap. b. は時として nimittakāraṇa という語に置き換えられている²⁵⁾。

以上のことから, Vaiśeṣika 学徒たちは, buddhi の知覚内容を述べる時には apekṣā という前分は相応しくなく, また buddhi を動力因として paratva 等が発生することを述べる時には, apekṣā の意味は, 共に用いられる動詞あるいはその派生語によつて表現されるので, apekṣā という前分を buddhi に附加するのは同義反復である, と感じていたと考えられる。

20) p. 239, l. 3.

21) p. 274, l. 1, p. 322, l. 1, p. 395, l. 2, p. 396, l. 3, p. 398, l. 1, p. 398, l. 3.

22) e. g. apekṣābuddhivinaśād dvitvaguṇasya vinaśvattā. p. 279, l. 2.

23) 例えば, apekṣābuddhijanyāḥ (KA p. 108, l. 23), apekṣābuddhir utpannā dvitvaṃ janayati (NK p. 293, l. 2), dvitvaṃ buddhijam (KA p. 129, l. 12).

24) 例えば, apekṣābuddhis tu dvitvasyotpādikā (KA p. 129, l. 10), na cāpekṣābuddhim vinotpattiḥ (VV p. 464, l. 29).

25) PBh p. 409, l. 2, p. 410, l. 3. 後期の著作に於ては枚挙に遑がない。なお, ap. b. は NK (p. 409, l. 2) では apekṣājñāna に置き換えられている。さらに, VV (p. 464, l. 20, l. 28) では, apekṣākāraṇa に置き換えられている。また, VV (p. 517, l. 17) では, apekṣā という語は kāraṇa を意味すると説かれている。

【附記】 PBh との前後関係が問題とされる『勝宗十句義論』にも ap. b. ないしそれに相当の概念を説くと考えられる箇所がある。

【1】 彼体云何。謂属一時等遠覚所待一実所生彼詮縁因是名彼体。(T 54, 1263b)

IV. 結 論

以上のことから, ap. b. について次の様にまとめることが出来よう。

(i) paratva, aparatva, dvitva 等, dviprthaktva 等の四種の性質は, 主観とは関わりなく実体に内在するのではなく, 主観の介在を俟つて始めて生ずる。この介在する主観こそが ap. b. である。また, この様にして発生した paratva 等は主観の産物とも言えるが, それらは主観ではなく, 実体に内属する性質として客観的に存在するものとなり, かくして知覚の対象となるのである。これは Vaiśeṣika 学派では, その概念実在論からの必然の要請である。

(ii) ap. b. という複合語の前分 *apekṣā* は, ap. b. が paratva 等に対して持つ因果関係, すなわち ap. b. が paratva 等の動力因であることを示すものであつて, 知覚対象, 知覚内容との関係を示すものではない。

この二つの理由により, ap. b. とは, 「それを俟つてあるもの (paratva等) が生ずるところの知覚」「動力因としての知覚」を意味する。これに基づいて ap. b. に簡潔な訳語を与えるならば, 「契機知」「起因知」‘the perception as a cause’ あたりが適当であろうと思われる。したがつて, 近代の諸学者の与える訳語の中では, Faddegon の *fundamental intellection* のみが比較的妥当であることになる。

[2] 此体云何。謂属一時等近覚所持一実所生此詮縁因是名此体。(T 54, 1263b)

[3] 二体等数二別体等別体同類不同類為因。一体別体彼覚為因。(T54, 1264c)

[4] 彼体此体一時時相属待遠近覚為因。(T 54, 1264c)

伝統的な解釈を離れ, 意味を採つて試訳すれば以下の如くである。

[1][2] 『paratva / aparatva とは何か。同一の時間あるいは方角 [の各々の地点] と結合した [二つの実体のうち] 一つの実体に, 「遠い」 / 「近い」という知覚 (buddhi) を起因として生じ, 「かなた」 (para) / 「こなた」 (apara) という言語表現と観念の原因であるところのもの, これが paratva / aparatva と言われる。』この知覚が ap. b. に相当することは明瞭である。

[3] 『dvitva 等の *saṃkhyā* と dviprthaktva 等の *prthaktva* は, 同類の (*sa-jātiya*), あるいは同類でない (*asama-jātiya*) [実体] を [内属] 因とし, *ekatva* と [*eka-*] *prthaktva* [を非内属因とし], ap. b. を [動力] 因とする。』この訳は, 「彼覚」という不可解な文字が「待覚」の写誤, 誤刻である可能性に基づく。

[4] 『paratve と aparatva は, 同一の時間あるいは方角 [の各々の地点] との結合 [を非内属因とし], 遠くにある・近くにある [実体を内属因とし], ap. b. を [動力] 因とする。』これは, 玄奘が, ‘-viprakṛṣṭasaṃnikṛṣṭāpekṣābuddhi-’ の如き原文 (漢訳すれば「遠近待覚」) を誤訳した可能性に基づく。